源氏物語「面影」論

――「明石」巻における「面影そひて」をめぐって――

西野　翠

一　「明石」巻における「面影」

「明石」巻では、光源氏と明石の君との出会いと別れが語られる。次に示すのは、光源氏と明石の君との別れが間近に迫った場面である。

　正身の心地たとふべき方なくて、かうしも人に見えじと思ひしづむれど、身のうきをもとにて、わりなきことなれど、うち棄てたまへる恨みのやる方なきに、面影そひて忘れがたきに、たけきこととはただ涙に沈めり。（「明石」②二七〇頁）

源氏の帰京を受け、明石の君自身の「心地」はたとえようもないものであるが、明石の君はすこしもそのような心を見せまいと思い沈む。一方で、自分の宿運の拙さはどうすることもできないことであるものの、自分をうち棄てていく光源氏への「恨み」は晴らしようもなく、「面影そひて忘れがた」いため、できることといったらただ涙に沈むことであったという。明石の君のなかで、自分自身に向けた「心地」と、光源氏に向けた「恨み」とがあいまって更に増幅されていくのであるが、ここで注目したいのが、「面影そひて忘れがたきに」の一節である。『源氏物語大成』（中央公論社）によれば、この一節は大島本にはなく、青表紙本では、横山本、陽明本、池田本、後柏原院本、三条西家本にみられ、河内本では「面影そひて忘れがたきままに」とあり、現代注釈書では日本古典文学大系、源氏物語評釈、日本古典文学全集、新編日本古典文学全集などがこの一節を採用している。この一節の有無は当該場面の理解に大きな影響を与えるものであるが、とくにこの「面影」とは誰のものを指しているものかについては議論の余地があるところである。

現代注釈書では、日本古典文学大系が「源氏の面影が、自分（娘）の身に添うて（目先に散らついて）」と解し、新編日本古典文学全集が「君の面影が目先にちらついて忘れようにも忘れられないので」と訳すなど、光源氏の「面影」とするものが多勢を占める。しかし、玉上琢弥『源氏物語評釈』が『おもかげ』とは源氏のことであろう。とすると、『御おもかげ』とないのはおかしいが」としているように、「面影」に敬意がつけられていない点から明石の君の「面影」とする解釈の可能性も否定できない。

本稿では「面影」の表現史をおさえ、その背景にある文化的側面を明らかにし、光源氏の「面影」が明石の君に添っているのか、明石の君の「面影」が光源氏に添っているのか、という問題について考察したうえで、当該場面における明石の君のあり方について考えてみたい。

二　源氏物語以前における「面影」

『源氏物語』における「面影」を考察するため、まず、『源氏物語』以前における「面影」を上代の歌集である『萬葉集』、中古の勅撰和歌集である『古今和歌集』、そして、中古の歌物語である『伊勢物語』の中に確認してみたい。

『萬葉集』の和歌には「面影」の用例が十四例確認できるが、おおむね「面影にして見ゆ」と「面影に思ほゆ」の二種類で区別できる。例えば、「面影にして見ゆ」は次のような形をとる。

陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを　（巻三・三九六）

この和歌から、相手は遠くあるのに、自分の元から見えるものとして「面影」が位置づけられていることがわかる。つまり「面影」は、遠くにあっても目の前に立ち現れたものとして捉えられていたのである。そしてそのような「面影」は、相手の思いによって現れるものと考えられていたようだ。

夜のほどろ我が出でて来れば我妹子が思へりしくし面影に見ゆ　（巻四・七五四）

しきたへの衣手離れて我を待つとあるらむ児らは面影に見ゆ　（巻十一・二六〇七）

ここでは、離れている「我妹子」や「児ら」がきっと自分のことを恋しく思っているのだろうと感じられており、「面影」が現れることの前提には、相手が自分を思っているという状況が想定されていたことがわかる。「面影」は、相手の強い思いを感知させる機能を備えていたと考えられる。そして、このような「面影」の捉え方や、こうした機能によって、次のような「面影に思ほゆ」の表現も派生したと考えることができる。

かくばかり面影のみに思ほえばいかにかもせむ人目繁くて
（巻四・七五二）

我妹子が笑まひ眉引き面影にかかりてもとな思ほゆるかも
（巻十二・二九〇〇）

前者は、こんなにも「面影」に見えるだけで恋しく思われたらどうしたものだろうか、という思いに反して、「人目繁くて」に続く会いに行けない状況を詠み込んでおり、「面影に見ゆ」ことによって、相手を思う状況が派生することを示している。後者もまた、目先にちらつく恋しい「我妹子が笑まひ眉引」いている「面影」によって、相手のことが恋しく思われることを詠んでいる。こうした表現の派生を辿ることによって、「見ゆ」と「思ほゆ」とを伴い詠じられる「面影」の和歌は、そのどちらもが深く影響し合っていると考えられる。恋歌の中の「面影」について、林田孝和が「身は遠く隔絶していても、思いこがれる人の情念は影となって、恋しい者の眼前にたち現れるというのである」と論じたように[1]、「面影」が見えることによって、相手のことが自然と想われるというのが、上代における恋歌のあり方だといえる。同時に、「心的領域がたやすく空間領域にスライドし、思うことが目に見えることとしてうけとめられている」と犬飼公之は述べた[2]。上代における「面影」とは、想う人の「面影」が想われる人の目の前に現れるのを基本とし、その存在を身近に感じさせるものであったといえよう。そのように考えれば、「面影」は現代で捉えられているような単なる幻影ではなく、実体をもった魂としてとらえられていたと考えてもよいように思われる。

ところが、『萬葉集』では、魂を感じさせるものとして用いられていた「面影」は、『古今和歌集』においてはまた異なった様相を見せる。「面影」が用いられた和歌は次の二例である。

夢だに見ゆとは見えじ朝な朝なわが面影に恥づる身なれば
（六八一・伊勢）

来し時と恋ひつつをれば夕暮れの面影にのみ見えわたるかな
（一一〇三・紀貫之）

『萬葉集』と同じように「見ゆ」ものとして「面影」を捉えていながらも、誰の「面影」が感じられるのかという点に大きな違いが見られる。『古今和歌集』では、恋しく想う相手の魂としてよりも、むしろ、実在する自らの姿や形を指しているようだ。ものに添う「影」としての語感が強まり、「影」と「面影」との言葉が同じ意味を担うようになったことがわかる。

では、同じ平安時代の作品である『伊勢物語』の中にも、同じようなあり方が見られるだろうか。

「面影」の用例は三例ある。いずれも物語内の和歌に用いられて

おり、『古今和歌集』の「面影」というよりは、『萬葉集』の「面影」としての様相を濃くしていた。

人はいさ思ひやすらむ玉かづらおもかげにのみいとど見えつつ　（一三三頁）

百年に一年たらぬつくも髪われを恋ふらしおもかげに見ゆ　（一六五頁）

右の用例から、詠者が「面影」として捉えているのは、自分を恋い慕う相手であることがわかる。離れているからこそ思い起こされる「面影」は人の魂とも言い換えることができ、その思い起こされる恋しい人の姿を見ることで、詠者もまた恋しい気持ちを喚起させられるのだ。こうした特徴は『古今和歌集』のものではなく、『萬葉集』的なあり方であるといえよう。

また、『古今和歌集』の中には、特殊な例として、自分が思うことによって相手の「面影」が自分の目先に立つ場合も見られた。次の和歌では、会わないでも離れていると思うことはない。忘れる時がなければ、相手の「面影」が眼前に立つという。

目離るとも思ほえなくに忘らるる時しなければおもかげに立つ　（一五四頁）

これまでの用例が、相手が思うことによってその「面影」が詠者に見えるとしたものであった。「目離るとも」の歌に詠まれている、詠者の強い思いが相手の「面影」を引き寄せるとした点は非常に興味深く思われる。自らが忘れないことによって、相手の魂を引き寄せようとも解せるこの歌には、詠者のただならぬ恋情が現れているといえよう。

用例の数を踏まえれば、相手が思うことによって自分の目先に相手の「面影」が現れるのが一般的とするのが妥当であろう。しかし、自分が思うことによって相手の「面影」を、自分の元に引き寄せるとする「目離るとも」の和歌があることを考慮すると、詠者の思いが「面影」を引き寄せることもできると考えられる。

『源氏物語』以前の「面影」の文学史を辿ると、その語感が僅かに変化したことがわかる。いずれの時代においても、「面影」とは「見ゆ」「思ほゆ」ものであるが、上代の霊的な語感をもつ「面影」は、実見する相手の魂を指していたのに対し、その要素を継承しつつも、平安時代では、類語の「影」との意味が近づき始め、霊的な語感はその影を潜めた。こうした流れを受け、『源氏物語』ではどのような語感で用いられているのだろうか。続いて検証していきたい。

三　源氏物語における「面影」

作中に用いられている「面影」は、諸本の異同が見られる「明石」

巻の用例を含め、三十三例確認できた。

男女の比率をみてみると、圧倒的に男君の視線によって描かれる女君の「面影」が多く、三十三例中二十五例を占める。また、その中でも紫の上の「面影」が多く、十例ある。それらの用例から紫の上の「面影」の特徴はふたつあると考えられる。ひとつは、源氏と夕霧というふたりの男性に「面影」と捉えられていた点、もうひとつは、彼女の「面影」は藤壺と比較されていくという点である。

まずは前者について考えたい。岩下光雄は、紫の上の「面影」が占める比重の重さから、源氏物語第一部における「面影」の用語意識が「源氏と紫上との愛の絆の世界を語る」ものであると述べた。[3] たしかに、十例の用例中七例が源氏によって捉えられる紫の上の「面影」であり、際立って見える。

①わが罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて、生けるかぎりこれを思ひやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべき思しつづけて、かうやうなる住まひもせまほしうおぼえたまふものから、昼の面影心にかかりて恋しければ、
（「若紫」①二一二頁）

②源氏「面影は身をも離れず山桜心のかぎりとめて来しかど
夜の間の風もうしろめたくなむ」　（「若紫」①二一八頁）

③かくて後は、内裏にも院にも、あからさまに参りたまへるほどだに、静心なく面影に恋しければ、あやしの心やと我ながら思さる。　（「葵」②七五頁）

④道すがら面影につと添ひて、胸もふたがりながら、御舟に乗りたまひぬ。　（「須磨」②一八六頁）

⑤何ごともらうらうじうものしたまふを、思ふさまにて、今は他事に心あわたたしう行きかかづらふ方もなく、しめやかにてあるべきものをと思すに、いみじう心惜しう、夜昼面影におぼえて、たへかたう思ひ出でられたまへば、なほ忍びてや迎へましと思す、　（「須磨」②一九三頁）

⑥「かへすがへすいみじき目の限りを見尽くしはてつるありさまなれば、今はと世を思ひ離るる心のみまさりはべれど、『鏡を見ても』とのたまひし面影の離るる世なきを、かくおぼつかなながらやと、ここら悲しきさまざまの愁はしさはさしおかれて、」　（「明石」②二三六頁）

⑦またかうざまにはあらでこそ、ゆゑよしをもてなしたまへりしかと思しくらべらるるに、面影に恋しう、悲しさのみまされば、いかにして慰むべき心ぞといとくらべ苦し。
（「幻」④五三三頁）

①は源氏の目先に、昼間見た紫の上の「面影」がちらつき、そ

の藤壺に似た姿がとても恋しく思われるとするものである。この場面で示される「昼の面影」こそが、初めてみた紫の上の姿であった。②は、源氏が北山の尼君に寄せて書いた文の中に記された和歌である。この文を遣わしたのも、紫の上を養育する北山の尼君から、紫の上を引き取りたいという源氏の思いを伝えるためであった。紫の上の「面影」が自分の身を離れないほどに、彼女のことが強く思われるのだとする気持ちを伝えることによって、尼君からの承諾を望んでいる源氏の姿が鮮明になっている。③では、妻となった紫の上の「面影」が恋しく思われるので、そのような変化を自分自身でも「あやしの心や」と思う源氏が描かれている。離れた紫の上を恋しく思うこの姿は、『萬葉集』の恋歌に見られた「面影」の語感を受け継ぐもののように思われる。しかし、上代のありかたを受け継いでいるとするのであれば、源氏の自省にあたる「あやしの心や」という部分に疑問が残る。④、⑤、⑥の用例では、源氏と紫の上との距離が他の用例と大きく異なる。更に、④⑥の用例では源氏に感じられる紫の上の「面影」であり、⑤は紫の上によって感じ取られる源氏の「面影」である。まるで両者の「面影」が入れ替わるかのように、同時に描き分けられているという点で注目すべき用例であるといえよう。互いの「面影」を感じることによって、情緒を揺さぶられるという点については、『萬葉集』によく見られた恋の場面からの系譜が読み取れる。⑦もまた、先の用例に続き、別れに伴い感じられる「面影」であるが、この場合では紫の上が亡くなっている。別れの場面で描かれる「面影」には、再び会うことを望む思いが伴っていたが、死に際しての「面影」はその思いがより強まっているとするのが妥当であろう。広田收は、「桐壺更衣の死・藤壺の死・紫上の死、さらに宇治大君の死」に「先立つ女と残される男」という構図が共通していることに触れ、「去った者の魂に対する思いとなお身近にいてほしいという願いの表れとが同時に存在」すると述べた。[4] 物語において、数多くの場面で描かれる紫の上の「面影」には、源氏の強い思いというものが現れていると思われる。

　以上の七例の用例からは、他の登場人物とは一線を画すふたりの「愛の絆」を読み取ることができる。「若紫」巻において、幼き紫の上の「面影」を目にした時から、「幻」巻において亡き紫の上の「面影」を恋しく思うように、源氏と紫の上との物語の中では、「面影」の語は大きな意味を占めていることは明らかであろう。しかし、次の三例のように、夕霧もまた紫の上の「面影」を捉えていく人物でもある。源氏以外の登場人物によって捉えられる「面影」とは、どのような意味合いをもち、源氏の捉えるそれとはどのような違いをもつのであろうか。

⑧心にかけて恋しと思ふ人の御事はさしおかれて、ありつる御面影の忘られぬを、こはいかにおぼゆる心ぞ、あるまじき思ひもこそ添へ、いと恐ろしきこと、とみづから思ひ紛らはし、他事に思ひ移れど、なほふとおぼえつつ、（「野分」③二六九頁）

⑨かやうのことを、大将の君も、げにこそありがたき世なりけれ、紫の御用意、気色の、ここらの年経ぬれど、ともかくも漏り出で、見え聞こえたるところなく、しづやかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をも消たず身をもやむごとなく、心にくくもてなしそへたまへることと、見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられける。（「若菜上」④一三四頁）

⑩ほのかに見し御面影だに忘れがたし、ましてことわりぞかしと思ひゐたまへり。（「幻」④五四〇頁）

⑧では、直前にみた紫の上の「御面影」が忘れない自身を自覚した夕霧が、「あるまじき思ひもこそ添」ったとしたならば、とても恐ろしいことであるとしている。源氏と異なるのは、垣間見た「面影」に恋情を燃やすのではなく、そのような思いを抱くことを「いと恐ろしきこと」として認識している点である。しかし、そのように自制しようとする思いとは裏腹に、彼はこの後も紫の上の「面影」に魅せられていく。⑨では、垣間見た紫の上の「面影」をなおも「忘れがたく」思う夕霧の姿が描かれている。この用例の特徴的な点は、源氏が藤壺を思い出す縁として紫の上を見ていたように、紫の上の姿を基準として他の女君を思う夕霧が見られる点である。直接の恋のやり取りが源氏ほど描かれないながらも、このように夕霧から「面影」として捉えられているのには大きな意味があるだろう。⑩では亡き紫の上の「御面影」を思慕する夕霧が描かれており、「ほのかに見し」自分が、これほどまでに恋しく思うのだから、共に過ごしていた源氏の悲しみはよりいっそうのものであろうと、源氏の悲しみを思いやる夕霧の心中が示されている。以上の三例から、夕霧が思う紫の上の「面影」がある種の罪の意識を孕んだものであったと推測される。彼女の「面影」に囚われ、想い続けることを「あるまじきこと」と恐れを抱きつつも、心は彼女を追い続けるのが夕霧であった。思ってはいけないとする理性と、恋しく思う恋心とがせめぎ合う、葛藤を描くものとして「面影」が機能しているように思われる。

両者が思う紫の上の「面影」とは、その表現が異なっている。源氏は「恋し」いものや「離れ」ないものとして「面影」を捉えているが、夕霧にとって紫の上の「面影」は「忘れがたい」ものであるとしている。こうした表現は、上代には用いられていなかったものであるが、「恋し」や「忘れがたし」の語によって表される

ことによって、彼女への恋心の強さを表現しているとみえる。

紫の上の「面影」の特徴として挙げたものの後者については、すでに広田収によって、「ゆかり」を希求するきっかけとして「面影」が設置されているとし、『ゆかり』はこの世から「魂の行方」としてはるかかなたへ他界したもしくは手の届かぬ女への身代わりとして、男の身近に「面影」に添う女を地上に実現させる役割を負っている」と指摘されている。(5)

紫の上と藤壺とが重ね合わされていく点については、「若紫」巻に描かれている次の場面から読み取ることができる。

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。

（「若紫」①二〇七頁）

この「若紫」巻において、源氏の目がとまったのが、紫の上であった。彼の目がとまったのも、「限りなう心を尽くしきこゆる」藤壺にとても似ていたからであるという。このように、彼女が初めて登場した場面においても、藤壺に似ている姿が描かれている。

しかし、直接、紫の上と藤壺との「面影」が比較されたことはない。紫の上の「面影」が十例描かれる一方で、彼女が似ているとされる藤壺に対しては一例しか描かれていないという大きな差がある。紫の上の「面影」は藤壺に似たものとして解釈されるが、藤壺の「面影」を描く際に紫の上との共通点が描かれることはない。

髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人の面影にふとおぼえてめでたければ、いささか分くる御心もとりかさねつべし。

（「朝顔」②四八四頁）

広田氏の指摘するように、両者は重ね合わされていく存在である。「昼間見た紫の上の可憐な、しかも藤壺に生き写しの面影への執念が沸き上がってくる」とされていることからも、(6)藤壺に重ね合わされる紫の上の立場がよみとれる。

紫の上の「面影」が描かれていく背景には、光源氏や夕霧などの男性の強い恋心が示されるのはいうまでもない。「恋し」く、「忘れがた」い存在として紫の上の「面影」が思慕されていくあり方を踏まえると、上代における恋歌の象徴である「面影」を継承しているのが紫の上の「面影」だと考えられる。「面影」を見ることによって、恋心を喚起される源氏や夕霧の姿をみれば、そのように考えるのが妥当と思われよう。また、源氏との関わりにおいては、藤壺の「面影」と重ね合わされる紫の上の姿をみることができる。両者の比較に「面影」という魂を指す語がもちいられるこ

とによって、単なる容姿ではなく、それをも包括する魂の類似性が示されることになろう。紫の上個人に惹かれる源氏を描きながらも、その影に藤壺の姿を描き出すことによって、単なる恋慕以上に意味の重い、恋の様相が描かれているのではないだろうか。

だが、源氏物語における「面影」とは、単に、恋の場に使われるものに限らず、何らかの不吉さを漂わせる場面においてもみられる。不吉さを伴う「面影」は、それまでの和歌、散文には見られない特徴であり、この物語独自のあり方といえるのではないだろうか。

例えば、「須磨」巻には次のような場面がある。

帰り出でん方もなき心地して拝みたまふに、ありし御面影さやかに見えたまへる、そぞろ寒きほどなり。

（「須磨」②一八二頁）

この場面における「御面影」とは、源氏が見た亡き桐壺院の姿を指す。須磨への蟄居が決まった源氏は桐壺院の御陵を訪れるが、その場において亡き父の姿をはっきりと見た。「面影」を見たことによって、源氏にもたらされたのは「そぞろ寒きほど」の思いであった。「面影」によってある思いが喚起されるのは上代のあり方と変わらないが、「そぞろ寒きほど」の思いがもたらされた点は重要である。「そぞろ寒し」では、まさに霊物にとり憑かれるような感覚をさすのであろう。(7)

桐壺院と同じように、死者に対して用いられた「面影」が源氏物語には登場するが、その他に人ではない霊物に対して「面影」の語を用いることがある。

「なほ持て来や。所に従ひてこそ」とて、召し寄せて見たまへば、ただこの枕上に夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。

（「夕顔」①一六七頁）

某の院で夕顔と一夜を共にした源氏は、物の怪に遭遇した。夕顔の命を奪うこととなるこの物の怪は、源氏の夢の中に現れた女と同一とされている。夢に現れた女を、目覚めてもなお目にするというのがこの場面である。このような出来事は説話の中にも見られるようなものであるが、自分が体験をするとなるとやはり気味が悪いと源氏は感じる。未だに残る薄気味悪さの中、隣の夕顔を起こそうとするものの、すでに息を引き取っていたというのが、より一層この場面の不気味さを演出している。「夢に見えつる容貌したる女」とされるように、この「面影」は、誰のものであるかを明らかにはされていない。その上で、夢に見た人物を現実の世界でも見るということに、源氏はひどく怯えていた。このことから、「面影」は、本来であれば見てはいけないものがあらわれる折に見えるものなのではなかろうか。

類語の「影」には、扱ったような不吉さの象徴としての「面影」の姿が見られる。林田氏は『今昔物語集』の「移(リテ)二燈火(ノ)影(ニ)一死(ニタル)女(ノ)語第八」を例に、「燈火に人影が映ることを不吉として忌み、その影となって映った当人は死ぬという」風習が見られることを述べた。(8)

また、林田氏は、現代人が感じるよりも「遥かに身近な、ある種の実感をもって影を観取していたらしい」として、『竹取物語』においてもかぐや姫が「影にな」ることによって人ではなくなったとする場面についても論じている。(9)

御門、「などかさあらん。猶いておはしまさん」とて、御輿を寄せ給ふに、このかぐや姫、きと影になりぬ。はかなく、くちおしと思して、げにただ人にはあらざりけりと、「さらば御ともにはいて行かじ。もとの御かたちとなり給ひね。それを見てだに帰りなむ」と仰せらるれば、かぐや姫もとのかたちに成ぬ。

(新編日本古典文学全集『竹取物語』六一頁)

帝から求婚を迫られたかぐや姫は、自らを「影に」することによって、その手から逃れようとしている。「影にな」ることによって帝にもたらされたのは、「ただ人にはあらざりけり」といった恐怖ともとれる感情であった。

『古今著聞集』と『竹取物語』の二つの話に共通しているのは、「影」になることの不吉さである。『萬葉集』のように、恋愛の場において用いられる用例の他に、「夕顔」巻や「葵」巻に登場する物の怪に対して「面影」の語が用いられている点から、『源氏物語』における「面影」には、こうした不吉なものとしての「影」の語感が受け継がれているように思われる。一見、『古今和歌集』の場合と同じように、「影」の語感に「面影」の語感が寄ったかと思われる。だが、恋愛としての語感と、魂を指す語感、不吉さを生じさせる語感とを「面影」が併せ持つことによって、それぞれの意味を薄めることはない。さまざまな語感を備えつつ、「面影」が描かれていくことによって、単なる恋の場面として描くのではなく、その背後に不吉さを匂わせたり、緊迫感が演出されたりしている。物語の世界を、さまざまな要素を加えることによって演出する機能を『源氏物語』の「面影」は担っているのである。

四　「面影そひて」の表現について

「面影」の語がもつ不吉さについて考えてきたが、それを踏まえたうえで、当該場面に用いられている「面影そひて」の表現を考察したい。「添ふ」用例は、三八四例確認できた。その多くが現代語のように、物によりかかるという意味で用いられている中、九例は「面影」や霊物、死者と接触することを示している。

たとえば、「夕顔」巻において、夕顔を殺めた夢の女が登場した際に「添ふ」という表現が用いられている。

君は夢をだに見ばやと思しわたるに、この法事したまひてまたの夜、ほのかに、かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも同じやうにて見えければ、荒れたりし所に棲みけんものの我に見入れけんたよりに、かくなりぬることと思し出づるにも、ゆゆしくなん。　（「夕顔」①一九四頁）

夢に現れた女の姿を現実の世界でも見たことに対し、源氏は恐怖する。そうした人間とも判別のつかない女が身に添ったことに対し、「我に見入れけんたよりに」このようなことを引き起こしたのだとうかと思い、「ゆゆしく」思う源氏が描かれている。この場面以前でも夢に現れた女のことを「面影」として捉えている点から、源氏がひどく不吉なものを感じていることが現れた場面であると思われる。

物の怪と解されているこの女のほかに、源氏物語における物の怪の出現が描かれる「葵」巻においても、この場面同様に「添ふ」の表現が用いられている。

物の怪、生霊などいふもの多く出で来てさまざまの名のりする中に、人にさらに移らず、ただみづからの御身につと添ひたるさまにて、ことにおどろおどろしうわづらはしきこゆることもなけれど、また片時離るるをりもなきもの一つあり。
（「葵」②三二頁）

「夕顔」巻に出現した物の怪とは異なり、「おどろおどろしうわづらはしきこゆることも」ないものの、葵の上に「添ひたる」物の怪もまた、彼女を殺めることとなる。「添ふ」語が人を殺める力のある物の怪に付与されていることから、生者へ憑依していく物の怪に特有の表現として「添ふ」の語を捉えることができるのではないか。もしそのように考えることができるとすれば、「面影そふ」もたんに相手の様子を思い浮かべるという内容以上のことを示していると考えることができてこよう。

作中に登場した「面影そふ」の用例は、当該場面を除き、五例確認できた。

①かうやうのをりは、御遊びなどせさせたまひしに、心ことなる物の音を掻き鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりはことなりしけはひ容貌の、面影につと添ひて思さるるにも、闇の現にはなほ劣りけり。　（「桐壺」①二七頁）

ここで示されるのは、桐壺帝に添う桐壺更衣の「面影」である。一見、「面影」の語が用いられることによって、先に述べたような、強い恋情の現れともみえる。しかし、この用例が「面影」の用例の中で特異であるのは、相手である桐壺更衣はすでにこの世の人

ではないということである。実見できる「面影」が人の魂であることはすでに示した通りであるが、死者の魂が桐壺帝に添うことによって、彼をも連れて行ってしまいそうな印象を受ける。桐壺更衣の「面影」が、桐壺帝の命を奪うことにはならないものの、先に挙げた「夕顔」巻や「葵」巻との共通性も見いだせる、いささか不吉な場面として解するべきであろう。

桐壺帝のように、「面影に添う」状態を望む人がいれば、添われることを望まないものもいる。次に示す「浮舟」巻では、病に伏せっている匂宮の「面影」が浮舟に添う場面である。

②恨みたまひしさま、のたまひしことども面影につとそひて、いささかまどろめば、夢に見えたまひつつ、いとうたてあるまでおぼゆ。　（「浮舟」⑥一五七頁）

「いとうたてあるまでおぼゆ」とするほどに、浮舟にとって匂宮の「面影」が鬱陶しいものであることがわかる。この場面において特異であると言えるのは、匂宮の「面影」が浮舟のもとに現れるのと呼応するかのように、匂宮の体調が悪化しているという点である。浮舟のもとを離れて以来、体調を崩したとされているが、床に伏せっていた匂宮の魂が遊離して、浮舟のもとへと通っていたとするのであれば、この場面における「いとうたてあるまでおぼゆ」とする浮舟の強い嫌悪を解することができる。脳裏に浮かぶ幻影などではなく、匂宮本人の魂の訴えを身近に感じるからこそ、彼女は強い嫌悪を示しているのではないだろうか。

「面影にそふ」とは、遊離魂の可能性を示した語であろうか。次の場面にも、同じく遊離魂の可能性が示唆されている。

③道すがら面影につと添ひて、胸もふたがりながら、御舟に乗りたまひぬ。　（「須磨」②一七八頁）

④練の御直衣、指貫、さま変りたる心地するもいみじきに、「去らぬ鏡」とのたまひし面影のげに身に添ひたまへるもかひなし。　（「須磨」②一九〇頁）

右の二例は、源氏の須磨離京に際した場面である。京を離れる源氏には紫の上の「面影」が添い、京に残される紫の上には源氏の「面影」が添うという、特殊な例である。どちらの用例でも、死者は描かれていない。だが、先に示した遊離魂としての「面影にそひて」を踏まえると、どうであろうか。この点を、この場面がふたりの別れの場であることから考えると、ふたりにとってこの別れが永遠のものとしてもたらされる可能性が示唆されているように思われる。この後、源氏も紫の上も命を落とすことはないが、次に示す場面から、彼らの命に危険が迫っていたと解釈するのは妥当であろう。

女君も、かひなきものに思し棄つる命、うれしう思さるらむ

かし。

（「明石」②二七二頁）

源氏帰京後の紫の上の心情は右のように語られている。彼女にとってのこの度の別れがいかに意味のあるものであったかは、「かひなきものに思し棄つる命」の一節が物語っているのである。これまでの考察を踏まえ、「添ふ」語は、命の危機を示す機能をもっていると考えられる。

⑤思ひしよりはこよなくまさりて、をかしかりつる御けはひども面影にそひて、なほ思ひ離れがたき世なりけりと心弱く思ひ知らる。

（「橋姫」⑤一五一頁）

垣間見た宇治の姫君たちの、想像よりも美しい「面影」が気にかかって、「なほ思ひ離れがたき世なりけり」と薫は自分の心の弱さを思い知る。この用例も、他の用例と同じように別れの場面に用いられており、薫の心残りを示している。

これまでの用例を踏まえ、共通している点として、別れの場面に用いられることがあげられる。また、その別れへの心残りが相手のもとに「面影」となって立ち現れていることも指摘できる。一見、上代の和歌と同じように、情念が相手の元にたどり着いたこととして見えるが、源氏物語における別れがただの別れではなく、「須磨」巻の用例に強く現れているような、再会の見込みが立てないほどの、ある種絶望的な別れの場面に用いられている点に独自性がみえる。絶望的な表現として「面影添ふ」が成立していく背景には、登場人物の命が脅かされていることを物語る、「添ふ」の語感が大きな影響を及ぼしていると考えられる。「面影そふ」の表現は、「面影」のもつ不吉さを「そふ」の語によって、さらに不吉なものへと強調していると思われる。

相手の魂である「面影」として「そふ」ということは、その人物の魂にとり憑かれている状態をさしている。

五　面影に添う明石の君

当該の場面でも、「面影そひて」の形がとられているが、その「面影」の持ち主が誰であるのかが不明確であった。光源氏の「面影」が明石の君に添うのか、明石の君の「面影」が光源氏に添うのか。「御」がないことから、明石の君の「面影」と考えられなくもなさそうであるがどうであろうか。

これまでの用例を踏まえると、相手の「面影」が自分に添うことによって、感情を揺さぶられる登場人物の姿が生じることがわかる。当該場面において、感情を揺さぶられているのは、言うまでもなく明石の君であろう。光源氏の「面影」がいつまでも自分に添っている感覚がするからこそ、彼女は「忘れがた」く思い、こうした状況があるために、明石の君が「たけきこととはただ涙

に沈めり」という状況が導かれてくるのである。そのように考えれば、確かに、明石の君に源氏の「面影」が添うとする、従来の説が妥当であるといえよう。しかし、これまでの考察から、「面影そふ」は、死者やそれに準ずる霊物にとりつかれる事象として考えることができた。当該場面における源氏は、死者ではないために、一見その特徴にそぐわないかのように思われるが、何故、この一節がこの場面では用いられたのだろうか。

この疑問を解決するにあたって、光源氏の様子についても目を向けておきたい。強く願っていた帰京が叶うことになった源氏の心中は、「かうにはかなれば、うれしきにそへても、またこの浦をいまはと思ひ離れむことを思し嘆くに」（「明石」②二六二頁）という、京に戻れる喜びと、明石を離れる名残惜しさとで二分される。明石で過ごす日々の中で芽生える、明石の君を「ありしよりもあはれに」（「明石」②二六三頁）思う自分の愛情を自覚しながらも、「あやしうもの思ふべき身にもありけるかなと思し乱れ」（「明石」②頁）るのであった。源氏の帰京に際し、「心地たとふべき方なく」なる明石の君と時期を同じくして、源氏もまた、「思し乱れ」る日々を送っていたことが語られている。明石の君のことで「思し乱れ」る源氏の姿を、人々は冷淡に「あな憎。例の御癖ぞ」（「明石」②二六三頁）と見定めているが、源氏に長きに渡り付き添ってきた良清は「ただならず」（「明石」②二七二頁）思う。従者によって「例の」こととされるのと、良清によって「ただならず」とされることは、その意味がまるで対極にあり、矛盾した源氏のあり方と思われる。

人々が思うように、女性のことで頭を悩ますのが源氏の「例の御癖」であった。だが、このふたりの関係は、良清が思うように、「ただならず」とされるべきものであり、本来であれば成就するようなものではない。

「若紫」巻で、良清によってその出自を語られることによって、明石の君は物語に登場することとなる。その身分に反して心高いありさまを人々は「海竜王の后となるべきいつき女ななり。」（「若紫」①二〇四頁）として揶揄するが、源氏もまた「やむごとなき人に劣るまじう上衆めきたり」（「明石」②二五〇頁）と捉えていく。「上衆めきたり」の語で表されることから伺えるように、明石の君の人柄は貴い身分のものに劣らないものの、実際の身分はかなり低いものとして、源氏を含む人々は認識していたことがわかる。一方で、明石の君自身も、自分の身の程をわきまえた人物として描かれている。

正身は、おしなべての人だにめやすきは見えぬ世界に、世にはかかる人もおはしけりと見たてまつりしにつけて、身のほ

ど知られて、いとはるかにぞ思ひきこえける。

（「明石」②二三八頁）

明石の君は、「おしなべての」男性を見ることとさえ珍しい環境で、源氏の噂を耳にすることによって「世にはかかる人もおはしけり」と思われるだけでなく、自分の「身のほど」を思い知らされて、源氏のことをとても離れた人だと「思ひきこえける」のである。

この場面からもわかるように、源氏と恋をしていく明石の君自身も、自らの身分と源氏の身分とのかけ離れた状況にあることを認識していたのである。つまり、本来であればこのふたりの関係は、お互いの身分差によって自然と閉ざされていくべきものであった。そうした人々の予想に反し、ふたりの関係性は深まっていく。良清が「ただならず」としたのには、自分とふさわしい程に身分の低い明石の君と、自らの主・源氏とが結ばれることに対して、その身分差ゆえに不自然であるという思いが生じたと思われる。

こうした考察を踏まえると、次の場面はどうであろうか。

その人のことどもなど聞こえ出でたまへり。思し出でたる御気色浅からず見ゆるを、ただならずや見たてまつりたまふらん、わざとならず、「身をば思はず」などほのめかしたまふぞ、をかしうらうたく思ひきこえたまふ。（「明石」②二七二頁）

この場面では、帰京した源氏が紫の上に明石で過ごした日々を語っている様子が描かれているが、源氏が明石の君のことを「思し出でたる御気色」が「浅からず」見えたので、紫の上は「ただならず」思ったようであるとされている。先に挙げた場面と同様に、明石の君のことを想う源氏の姿が「ただならず」であるというのである。やはり、身分の劣った存在の明石の君に、源氏が恋情を向けることが不自然であると彼女は感じたようである。

だが、「面影そひて」の一節を踏まえると、この「ただならず」とされる源氏の姿にはより深い意味合いも付与されていると読むべきことがわかってくる。つまり、源氏の魂が明石の君のもとへとさ迷い出た可能性が示唆されるのである。紫の上と良清が「ただならず」としたのは、魂が通うほどに、源氏が明石の君に惹かれているという状況があったからではないだろうか。安東大隆は、和泉式部の「ものを思はば沢の蛍も我身よりあくがれ出したまかとぞ見る」（『沙石集』）の歌を解釈する中で、物思いと遊離魂との関連について次のように述べた。[10]

つまり、物思いをして呆然としている状態、心がここに無い状態の時に、「たま」は遊離して蛍となって浮遊している。逆の言い方をすれば、常態の時には、遊離することは無いことになる。

和泉式部の歌では、燃え上がる恋心によって「あくがれ出し」

自らの「魂」を喩えて「蛍」としているが、この歌から見出されるのは、魂が「物思い」によって自分の身から離れていく、魂の遊離性を当時の人々が信仰していたことである。また、安東氏の指摘するように、「常態」であれば遊離することはないとされていることから、従者たちの言うように、明石の君に恋情をむけることが「例の御癖」であるならば、彼の魂が遊離することはないといえよう。しかし、「ただならず」とされるように源氏の心は明石の君への思いに占められ、都に帰ってからも魂が抜け出るほど思っていると考えることができるのである。しかし、ここで大切なことは、明石の君の「面影」が光源氏に添うとされるのではなく、光源氏の「面影」が明石の君に添うとされ、さらにそれを「忘れがたき」ために涙に沈む明石の君の姿が描かれている点である。この表現からは明石の君の痛切さを如実に感じとることができる。光源氏の遊離魂の可能性を考えることができるとしても、それを呼び込んでくるのは明石の君の方なのであり、むしろ明石の君の魂こそ、光源氏にとりつこうとしているように思われる。

明石の君にとって、光源氏が帰京してしまうことは、永遠の別れのように思われたはずである。ただでさえ両者には身分の差があり、明石の君の悩みの種でもあった。それに伴って源氏が自分のもとから離れていくことによって隔絶性、絶望というものが明石の君に生じたとするのは妥当であろう。彼女が絶望するのも無理はない。源氏の血を一族に取り込めないとなると、明石の君の恋が破れる以上に大きな意味を成す。ここで暗示されてくるのが明石の入道の夢と、彼が何度も言い聞かせてきた遺言である。

『わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ、思ふさまことなり。もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね』と、常に遺言しおきてはべるなる　（「若紫」①二〇三頁）

入道の示す遺言とは、次に挙げる夢によるものであるが、その夢を実現する「心ざし」を遂げられず、「宿世」が異なるようであれば、「海に入り」て自らの命を棄てよ、と明石の君に言い聞かせたものであった。

みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす、みづからは、山の下の蔭に隠れて、その光にあたらず、山をば広き海に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆくとなむ見はべし。　（「若菜上」④一一三頁）

入道の夢は、明石の一族から皇族が生まれ、一族が再び返り咲くことを暗示したものであった。この夢を実現させるために、入道は自ら権勢とは遠い立場に身を置くだけでなく、娘に役割を担

わせたのである。こうした背景から、明石の君にとって、この度の別れがいかに重要なものであり、危機感を伴うものであったかはいうまでもない。源氏がもし、明石の君のことを見捨てるようなことがあれば、彼女に待つのは死である。「面影そひて」が示す、この場面での命の危機とは、入道の遺言によってもたらされる、明石の君の死を暗示したものであると考えられる。そのように、死が迫っている明石の君だからこそ、本来は添うはずもない源氏の「面影」が自分の身に添っていると感じられたのではないか。

源氏の「面影」が身に添うことによって、明石の君は悲しみに身を投じることとなる。明石の君は魂が身から離れ、光源氏のもとにとりつくほど恋しく思っている「忘れがたきに」から読み取れるのは、離れていく源氏を恋しく思う彼女の気持ちであった。しかし、身のほどを弁えた彼女にとって、その思いは抱いてはいけないものである。低い身分の自分を見捨てていく源氏のあり方を道理だと思い、入水にむかう気持ちと、「生きたい」と思う気持ちによって、明石の君の心は大きく揺れている。『源氏物語』においては死を予感させるはずの「面影そふ」が、明石の君にかえって生への渇望を駆り立てるという点において、当該の用例には特異性がみえるといえよう。死を間近に感じるからこそ、彼女は生へとすがろうとするのだ。そして、そうした彼女の思いが、彼女を都へと導いていくのである。

注

（1）林田孝和「影の文学」『王朝びとの精神史』桜楓社、一九八三年、八六頁。
（2）犬飼公之『影の領界』桜楓社、一九九三年、七二・七三頁。
（3）岩下光雄「源氏物語『本文と享受』の方法」和泉書院、一九九三年、九六頁。
（4）広田収「源氏物語における「ゆかり」の様相―面影・男のゆかり―」『日本文学』二八（一〇）、一九七九年一〇月。
（5）広田収「源氏物語における「ゆかり」の様相―面影・男のゆかり―」『日本文学』二八（一〇）、一九七九年一〇月。
（6）『新編日本古典文学全集　源氏物語』①「若紫」、二二三頁、頭注。
（7）松井健児「光源氏の御陵参拝」『源氏物語の生活世界』翰林書房、二〇〇〇年。
（8）林田孝和「影の文学」『王朝びとの精神史』桜楓社、一九八三年、八六頁。
（9）林田孝和「影の文学」『王朝びとの精神史』桜楓社、一九八三年、八四・八五頁。
（10）安東大隆『「ものを思はば……」考―遊離する魂―』『別府大学国語国文学』（五二）、二〇一〇年十二月。

（付記）本論で使用する『源氏物語』の本文は、『新編日本古典文学全集　源氏物語』①～⑥小学館により、巻名、冊数、頁数を附す。また、『萬葉集』『古今和歌集』『伊勢物語』の引用についても新編日本古典文学全集による。

（二〇一六年度卒業）